

なにわっ子わくわく未来プログラム

(就学前児童の健全育成に向けたプログラム)

資料編



大 阪 市
平成 2 1 年 3 月

『なにわっ子わくわく未来プログラム』(資料編)

～目次～

試行事業・フィールドワークの実践報告

平成19年度

保育所・幼稚園等における実践プログラムの試行について	1
～ふれあい遊び、調理体験～	

平成20年度

保育所・幼稚園等におけるフィールドワークについて	27
実践方法と実施機関等一覧	28
NPO法人大学コンソーシアム大阪からの報告書より	31
1 養育者との愛着形成	32
2 生活リズム(基本的生活習慣の育成)	78
3 食	134
4 絵本	198
5 集団遊び	260
演劇ワークショップ実施機関の振り返りより	281

就学前児童生活実態アンケート調査の結果報告

平成19年度大阪市就学前児童生活実態アンケート調査結果報告 . . .	337
-------------------------------------	-----

「なにわっ子わくわく未来プログラム」 資料編について

本資料編は、「なにわっ子わくわく未来プログラム」の策定に向けて平成19年度・20年度に実施した現場での試行事業とフィールドワークの実践報告、および平成19年度に実施した就学前児童生活実態アンケート調査の結果を掲載しています。

試行事業とフィールドワークの実践報告には、これらの取り組み内容と結果を中心に構成した本編「具体的プログラム」の課題設定の背景やデータの裏付け、フィールドワーク等実施時の具体的な展開、より発展的な実施案の提示などの内容を掲載しています。

プログラム策定に先立ち、就学前児童の現状を把握するために実施した生活実態アンケート調査の結果と合わせて、現場でのプログラム活用をはじめとする日々の実践にあたっての参考資料として生かしていただきたいと思えます。

保育所・幼稚園等における 実践プログラムの試行について (平成19年度)

～ふれあい遊び、調理体験～

【目次】

はじめに	2
1 事業の概要	3
2 アンケートの概要	10

はじめに

幼稚園や保育所、さらには在宅子育て家庭への支援の場で、就学前児童の健全育成に向けた共通の視点をもって日々の活動に活用できる「なにわっ子わくわく未来プログラム（就学前児童健全育成プログラム）」の策定にあたり、平成19年度の取り組みとして、市立幼稚園や市立保育所、地域子育て支援センターにおいて、「ふれあい遊び」や「こどもの調理体験」を通して、親子の愛着形成や直接体験によるこどもの心身の発達を促す試行事業を実施した。

実施した保育所や幼稚園などにおける試行事業の実践結果として、平成19年度にとりまとめた「就学前児童健全育成プログラム策定にかかる中間報告書」に掲載した内容を報告する。

なお、実施機関は次のとおりである。

（平成19年度試行事業指導・実施機関一覧）

テーマ	指導	実施機関
ふれあい遊び	支援センター保育士	市立旭地域子育て支援センター （森小路保育所）
	愛知東邦大学教授 古市 久子	市立瓜破北幼稚園
	愛知東邦大学教授 古市 久子	市立城東幼稚園
	保育所保育士	市立西大道保育所
	支援センター保育士	市立福島地域子育て支援センター （海老江保育所）
	保育所保育士	市立三国保育所
	保育所保育士	子育て支援イベント（西成区子育ての集い）
調理体験	大正区保健福祉センター管理栄養士 こども青少年局子育て支援部管理栄養士・食育支援担当者	市立泉尾幼稚園
	港区保健福祉センター管理栄養士 こども青少年局子育て支援部管理栄養士・食育支援担当者	市立磯路保育所
	大正区保健福祉センター管理栄養士 こども青少年局子育て支援部管理栄養士・食育支援担当者	市立大正保育所

1 事業の概要

(1) 試行事業の目的

本試行事業は、平成20年度に策定する就学前児童健全育成プログラムがより実践的なものとなるように、幼稚園や保育所、地域子育て支援センターにおいて具体的なテーマに基づいた取組みを行ない、その成果を検証してプログラム策定に活かしていくことを目的に実施した。

(2) テーマの設定について

今日の社会環境の変化によって、地域交流や三世代同居が減少し、身近に育児を教えてくれる人がいない親世代が増加している。また、こどもの遊びに占めるテレビやゲーム等のメディア体験の増加、外遊びの減少等により、直接体験の機会が不足していること等が問題となっている。

就学前児童健全育成プログラム策定に向けた取組みの一環として、今年度実施した就学前児童の生活実態アンケートにおいても、回答のあった家庭の約9割が核家族世帯であり、家の中での遊びの上位をテレビやビデオ視聴が占めている現状が明らかになったところである。

また、アンケートの自由記述で多く見られた回答として、こどもの成長過程に現れる一般的な行動に悩んだり、日々の家事に追われて子どもと関わる時間的余裕がないと考えている養育者の姿も浮かび上がり、これら養育者の悩みを軽減できるような取組みが必要と考える。

そのため、本試行事業では、親子双方の育ちに繋がるテーマについて検討を重ねた。その結果、子どもにとっても養育者にとっても身近な素材であり、日々の生活に取り入れやすい「遊び」と「食」をテーマとした試行事業を実施することとした。

「遊び」については、手遊び等を通じてスキンシップの楽しさ・大切さを知ってもらう「ふれあい遊び」を選択した。また、「食」については、全身の感覚を通じて楽しむ「調理体験」に取組むこととした。

(3) 事業のポイントとねらい

ふれあい遊び	ポ イ ン ト
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 親子でふれあう遊びであって、覚えやすい歌や動きの遊び(短くて簡単なもの)を紹介する。 ・ 新しい遊びだけでなく、これまで、日本の家庭の中で親から子へ受け継がれてきた手遊び等を紹介する。 ・ 日常生活場面(お風呂、着脱時、睡眠前等)の合間合間に取り入れやすい遊び方・関わり方として、ふれあい遊びを紹介する。 ・ 発達段階に応じた遊び方の説明とともに、その遊びの効果(こどもにもたらす発育上の効果、養育者自身の気持ちへの影響)を伝える。
	事 業 の ね ら い
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 養育者との愛着の形成がこどもの健全な発達の基礎であることを啓発し、養育者が、こどもとふれあうことの大切さを再認識するよう働きかける。 ・ 日々の生活場面に取り入れやすい「ふれあい方」を紹介することにより、育児の負担感の軽減を図る。 ・ こどもの発達段階に応じた遊び方、関わり方と併せて、こどもにもたらす効果を紹介することにより、日常のこどもとの関わりに深い意義があることを啓発する。 ・ 世代を越えて一緒に参加できるふれあい遊びが、異年齢同士の楽しい時間を共有するツールとなることを知らせる。
調理体験	ポ イ ン ト
	<ul style="list-style-type: none"> ・ こども自らが食事作りの過程に関わる。 ・ 自分で作った料理を食べるうれしさを実感する。 ・ みんなで一緒に作り、できあがったものを味わう。 ・ 食事作りから配膳、後片付けまでの全ての工程をこどもに体験させる。 ・ 安全に配慮しながらも、できる作業はこどもにまかせる。
	事 業 の ね ら い
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全身の感覚の全てを刺激する体験、本物を通じた実体験を得る。 ・ 調理作業をまかせられ、その与えられた役割を果たすという経験により、自己達成感を高め、自信を持たせる。 ・ 普段携わることが少ない調理の過程を間近で見ることによって、素材の変化を楽しみながら「食」への関心を高める。

(4) 事業の種類及び対象者

テーマ	対象者	実施機関
ふれあい遊び	概ね 0 ~ 2 歳児とその 養育者	・ 地域子育て支援センター（親子教室） 2 か所 ・ 市立保育所（所庭開放事業） 2 か所 ・ 子育て支援イベント 1 か所
ふれあい遊び	幼稚園の 3 歳児、5 歳 児とその養育者	・ 市立幼稚園 2 か所
調理体験	幼稚園、保育所の 5 歳 児	・ 市立幼稚園 1 か所 ・ 市立保育所 2 か所

(5) 効果測定

事業内容を検証するにあたり、参加したこどもの養育者へのアンケート調査を実施するとともに、保育所や幼稚園等からは、試行事業に対する評価報告を受けることとした。

(6) 実施内容 (概要)

ふれあい遊び (0 ~ 2 歳児)

内 容	留意点
<p>保育士からあいさつ。本日の活動について説明する。</p> <p>みんなで輪になる等、保育士がよく見えるように座る。導入の遊びは、養育者も子どもも体を使った遊びをして、心と体をほぐしていく。</p> <p>保育士の動きを真似て親子で楽しめるよう、人形を使って子どもへの関わり方を説明する。</p> <p>【ふれあい遊び】(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ いないいないばあ ・ 一本橋こちょこちょ ・ ちょちょちあわわ ・ 路面電車 ・ げんこつ山のたぬきさん ・ あひるのダンス ・ グーチョキパーで何つくろう ・ ここはとうちゃんにんどころ  <p>『ふれあい遊び集』を配付する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゆっくり話しかけ、ゆったりとした気持ちで楽しめるような雰囲気を作る。 ・ 親子でふれあうことで、こどもの心の成長を促したり、親子の信頼関係がより深まったりすることを話す。 ・ こどもが保育士のそばに来た時には、一緒にふれあい遊びをしてみせる等して、楽しんでいるこどもの様子を養育者が感じとれるよう配慮する。 ・ 同じ遊びでも遊び方はいろいろあること、その年齢に応じた楽しみ方があること等を、遊びを通じて知らせていく。 ・ 病院の待ち時間や電車の中等、外出時におもちゃがなくても簡単な遊びで十分ふれあえることを啓発する。 ・ ふれあい遊びは、家庭でも楽しみながら行えるものであることを伝える。例えば「いないいないばあ」は、入浴前後の衣服の着脱時に、服から顔や手や足を出すときに遊べること等を助言する。 ・ こどもが喜んでいるか等投げかけながら、こどもと顔を見合わせて楽しめるよう声かけしていく。 ・ 家庭でも遊びを楽しみましょうと投げかける。

ふれあい遊び（3歳児）

内 容	留意点
<p>親子で「げんこつ山のたぬきさん」をして遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゲーチョキパーの由来を考えあう。（「石」「紙」「はさみ」） ・じゃんけんのルールを確認しあう。（パーとチョキはどっちが強い？それは何故？） <p>「げんこつ山のたぬきさん」の歌詞や動きにいろいろ変化をつけて遊ぶ。</p> <p>車や汽車になって親子一緒に走って遊ぶ。</p> <p>再度、「げんこつ山のたぬきさん」で遊ぶ。</p> <p>『ふれあい遊び集』を配付する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・じゃんけんに勝ったとき（大喜び）・負けたとき（悔しがる）・同点のとき、それぞれの豊かな表情を確認しながら、「いっぱい笑って遊びましょう」と声をかけ、繰り返しふれあって遊ぶ楽しさを伝える。 ・「げんこつ山ってどこにある？」とこどもに問いかけながら、イメージを膨らませ、より遊びが楽しくなるように配慮する。 ・一旦、遊びの種類を変える。 ・親子が前後に連なり、全身を動かして遊ぶことを楽しませる。 ・遊び（の記憶）を確かなものにするため、もう一度遊ぶ。 ・家庭でも遊びを楽しみましょうと投げかける。



ふれあい遊び（5歳児）

内 容	留意点
<p>親子でペアになって「おちゃらかホイ」で遊ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「勝った時」「負けた時」「同点の時」のポーズを確認しあう。 （「バンザイ」「泣く」「両手を腰」） <p>親子でリズム遊びをする。</p> <p>【リズム遊び】（例）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ホーキーポーキー」ダンス ・「さあみんなで」リズム手遊び ・「やきいもグーチーパー」リズム手遊び <p>『ふれあい遊び集』を配付する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「おちゃらかホイ」はじゃんけんの勝敗とともに、コミカルな動きを楽しむよう、表情を豊かにして働きかけていく。 ・テンポを速め、快を伴う緊迫感に導くことで集中力を高める。 ・途切れなく繰り返すことによって、失敗しないかドキドキしながら遊べる。 ・踊り方を伝える。（指示された体の部分を前に出したり引っ込めたり、回したりする動きを示範してみせる） ・「ホーキーポーキー」では、体の部位だけでなく、「よろこび」や「怒り」等、抽象的な言葉も提案し、言葉への関心を持たせる。 ・「さあみんなで」では、隣の人が間近に感じられるよう座らせ、リズムカルに互いに触れ合って遊べるようにする。 ・「やきいもグーチーパー」は、こどもたちがよく園でしている遊びなので、こどもたちが養育者に教えながら一緒に楽しむ。 ・家庭でも遊びを楽しみましょうと投げかける。



調理体験

内 容	留意点
<p>栄養士による講話を聞く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・エプロンシアター  <p>調理実習開始</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロールおにぎりを作る(ラップに巻き終えたら、自分の名前シールを貼る) ・シューマイを作る(みんなで交代で材料を入れてこねる。一人4個ずつ皮に包む) ・シューマイを、名前の書いてあるシートに乗せて蒸し器へ入れる。 <p>食材の説明 </p> <ul style="list-style-type: none"> ・食育支援担当者から、今日使った食材(野菜や卵、小麦粉等)の説明をする。 <p>盛り付け(栄養指導室へ移動)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・蒸し器のしゅうまいの様子をこどもたちに見せる。 <p>試食 </p> <ul style="list-style-type: none"> ・みんなで「いただきます」 ・みんなが食べ終わるのを待って、「ごちそうさまでした」  <p>後片付け</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の使った食器を各自洗う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・食べた物が体内でどう消化されていくのか、わかりやすく説明する。同時に、朝ごはんの大切さ、排泄の重要性も説明する。 ・こどもに分かりやすい言葉で、また、担当者が作り方の見本を示しながら、こどもの調理したいという興味を高める。 ・こどものペースで作るように見守り、適宜、介助していくようにする。 ・こども一人ひとりの作品(料理)に着目し、「うまく包めたね」等一人ひとりに声をかける。 ・野菜が畑でとれること、旬があること、小麦粉からいろんなものが作れること、生卵とゆで卵の違い等、実物を見せながら話す。 ・蒸す前と後の食材の変化を感じさせる。 ・ガス台の火や鍋の蒸気で火傷しないよう、安全面には十分配慮する。 ・自分で作ったものを食べる喜びを味わわせる。 ・食べ終わったこどもには、他のこどもが食べ終わるまで席を立たずに待つようにさせる。 ・食器を洗ったり、片付けたりすることを通して、調理だけでなく片付けまでが、調理体験であることを感じとらせる。

2 アンケートの概要

(1) 調査方法

「ふれあい遊び」については、事業実施当日と2～3週間後の2回に分けてアンケートを実施した（イベント開催時におけるふれあい遊びについては、当日分のみ実施）。「調理体験」については、実施日にアンケート用紙を家庭に持ち帰ってもらい、概ね3週間後を目処に回収した。

(2) 調査項目

主な調査項目は次のとおりである。

【ふれあい遊び】

	調査内容	項目
当日用	親子教室や所庭開放の利用状況	0～2歳児のみ
	当日プログラムの感想	3・5歳児のみ
	日々の生活における親子での遊びの状況	共通
	紹介した遊びについて	共通
	配付したふれあい遊び集について	共通
後日用	こどもと遊ぶ機会の変化	共通
	家でふれあい遊びをしてみた感想	0～2歳児のみ
	こどもが今興味をもっている遊び	3・5歳児のみ
	配付したふれあい遊び集の活用について	共通

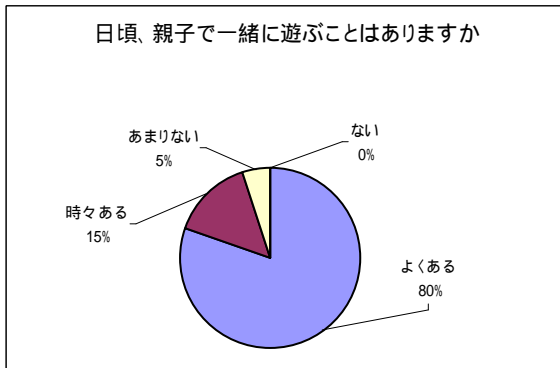
【調理体験】

調査内容
当日プログラムの感想（養育者によるこどもへの聴き取り）
家庭での「食」に関する会話について（実施前後比較）
食事の準備や後片付けに対するこどもの関わりについて（実施前後比較）
当日の食材にこどもの苦手なものがあったか（食べられるようになったか）
調理体験後のこどもの変化、食に関する悩み（自由記述）

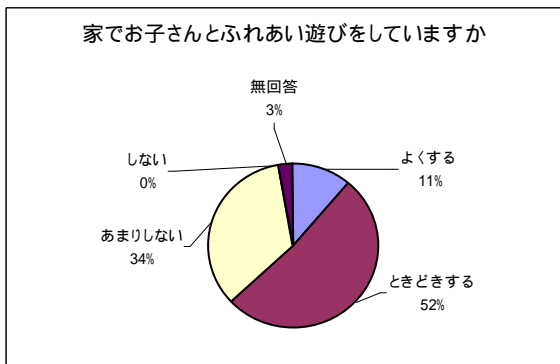
(3) アンケート結果

ふれあい遊び(当日分)

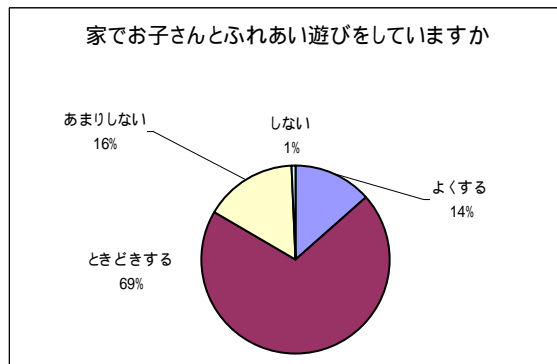
【0～2歳児】



【3歳児】



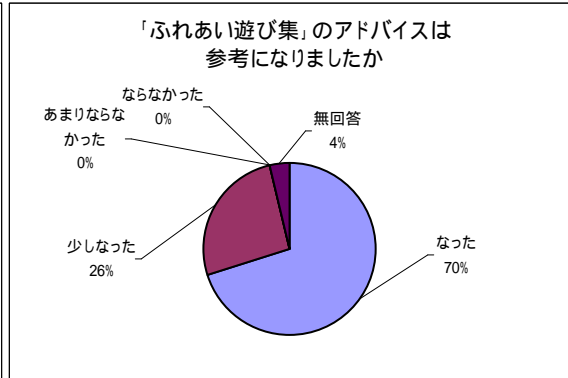
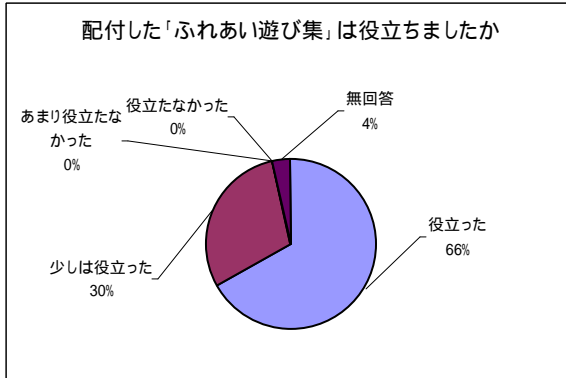
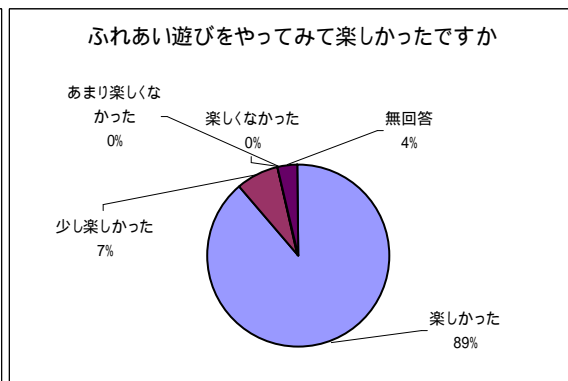
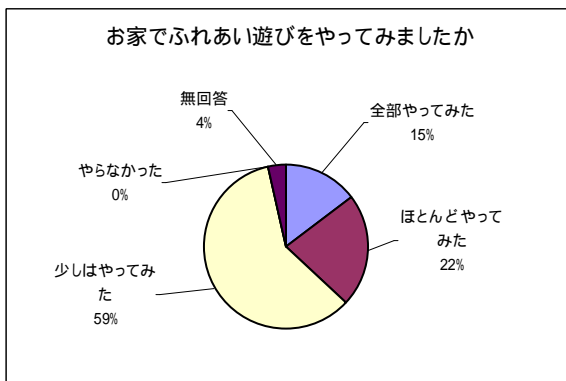
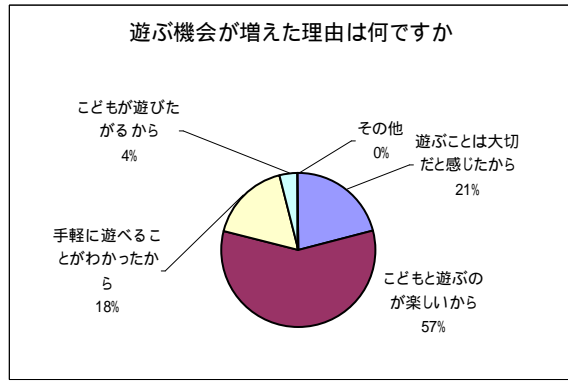
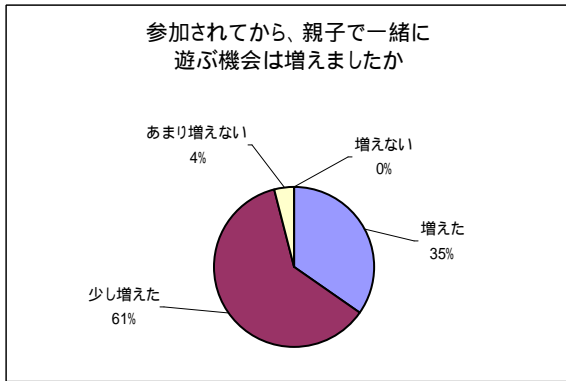
【5歳児】



家における親子でのふれあい遊びについて、0～2歳児ではほとんどの家庭において親子で遊んでいるが、3・5歳児では親子でのふれあい遊びの機会が減少してきている。年齢があがるにつれて、きょうだいとの遊びが増えるうえに、遊びの範囲が広がり、親が関わらなくても遊ぶことができるため、親子のふれあい遊びが減少してきているものと考えられる。

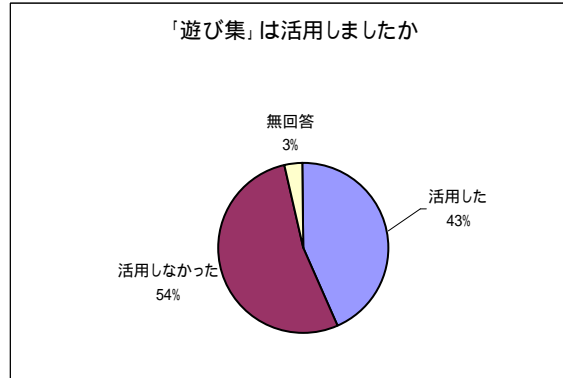
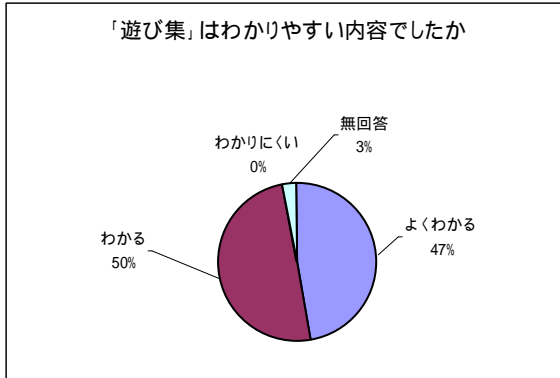
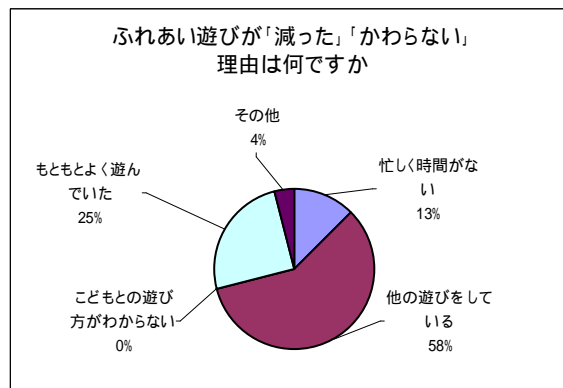
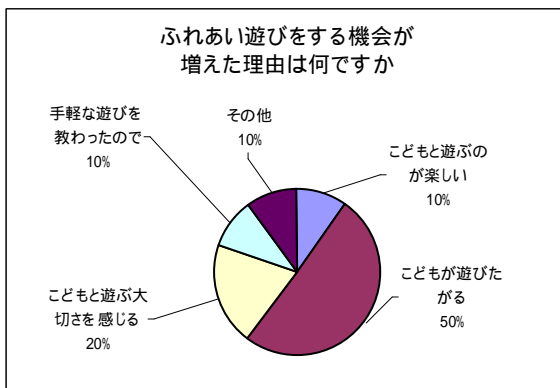
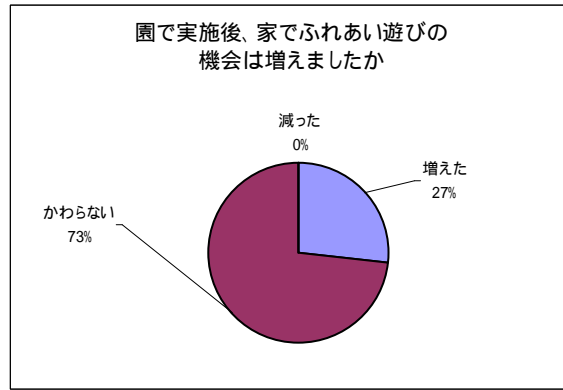
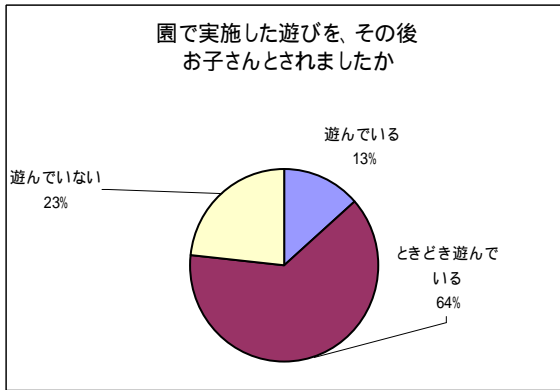
3・5歳児の養育者にふれあい遊びをあまりしない理由を尋ねたところ、「他の遊びをしている」が一番多く、次に「忙しく時間がない」が続いている。一方で、ふれあい遊びを「よくする」「時々する」と答えた養育者の主な理由としては、「こどもが遊びたがる」が最も多く、年齢があがると遊びの幅が広がり、ひとりで遊ぶ楽しさを覚えていくものの、養育者との関わりを求めているこどもの様子が伺えた。

ふれあい遊び（0～2歳児 後日分）



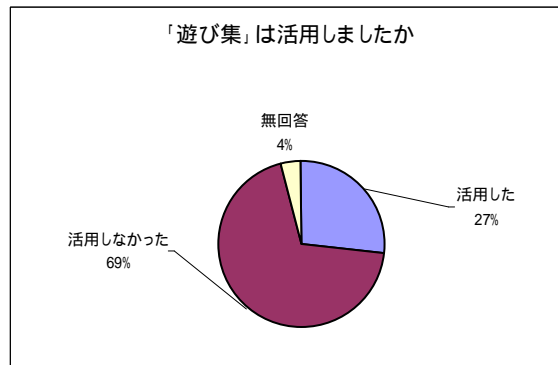
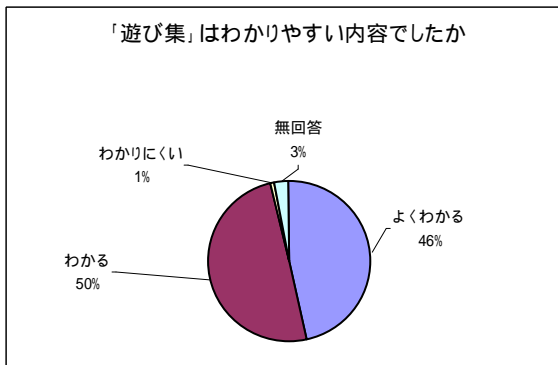
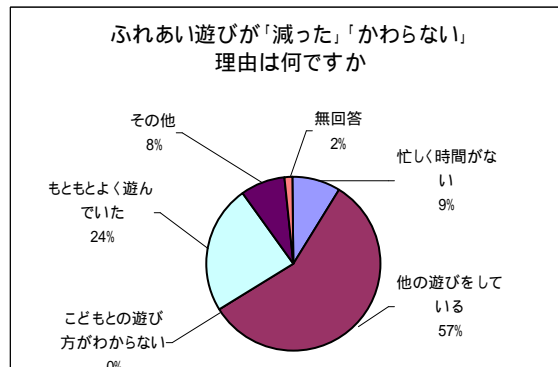
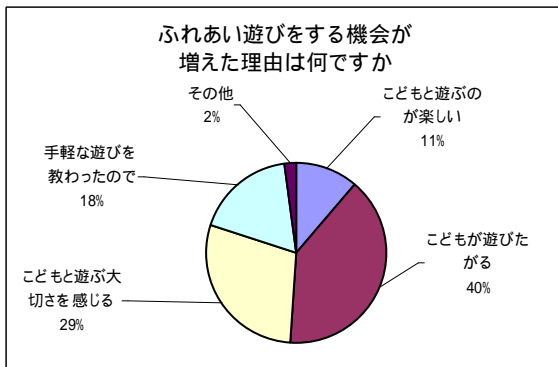
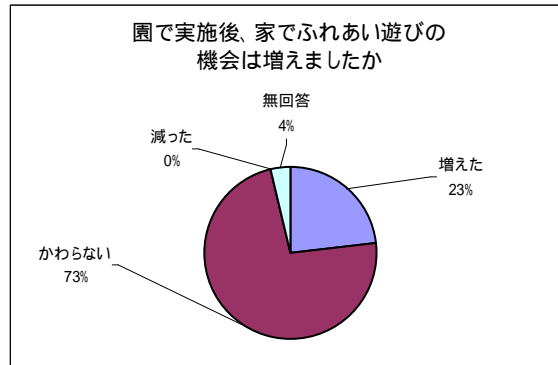
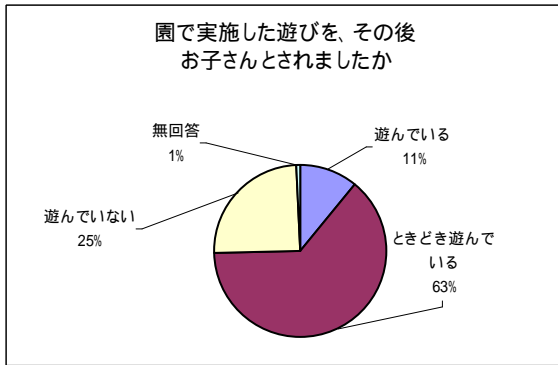
0～2歳児については、事業に参加してから、9割以上の親子で遊ぶ機会が増え、ふれあい遊びを以前より行うようになったと回答している。ふれあい遊び集については7割の養育者が参考になったと回答しており、紹介した遊びの内容が年齢に合っていたものと考えられる。また、遊び集がよく活用された理由としては、今回の事業に参加した養育者は幼稚園・保育所に通っていない子どもの養育者であったことから、1日のほとんどを子どもと過ごしており、子どもとの適切な関わり方としてより多くの遊びを求めていたことが考えられる。

ふれあい遊び（3歳児 後日分）



3歳児については、事業の実施後、約3/4の養育者がふれあい遊びの機会が増えなかったと回答している。その理由としては、日頃子どもとふれあい遊びをしない理由（当日分アンケート）と同様、「他の遊びをしている」が最も多かった。やはり、1回の事業では日々の生活や親・子どもの普段の遊びを変えるまでには至らなかったと思われる。また、今回のアンケートで「最近子どもがよくする遊び」について聞いたところ、「お絵かき」や「ブロック」といった回答が多く見られ、どちらかといえば物と関わる遊びの頻度が高いように感じられた。一方、ふれあい遊びの機会が増えたと答えた養育者も1/4強程度おり、その主な理由が「子どもが遊びたがる」であったことから、試行事業に参加した子どもの中には、楽しくふれあえた経験を家でも求めている姿が伺えた。ふれあい遊びの機会を1度だけでなく繰り返し提供し啓発することで、家庭でも取り入れられる割合が高まることが期待される。

ふれあい遊び（5歳児 後日分）



5歳児については、事業の実施後は3歳児と同様の傾向であり、約3/4の養育者がふれあい遊びの機会が増えなかったと回答している。

遊び集の活用は、3歳児よりもさらに活用した割合が減少し、約1/4となっている。その理由としては、冊子で紹介したふれあい遊びが3・5歳児共通の内容であったため、5歳児には物足りないものであったことが考えられる。年齢に関わらず親子でのふれあい遊びの大切さを伝えていくことは重要であるが、5歳児には、簡単にできる遊びにプラスして、応用性のある遊びが必要であると考えられる。

ふれあい遊び（自由記述）

【ふれあい遊び集（当日配付冊子）への意見】

遊び集への意見（当日回答分）

遊びの種類	もっとたくさんの遊びを知りたい。
	外での遊びがあってもいいと思う。
	童謡、わらべ歌を増やしてもいい。
冊子の構成	アドバイスなどこどもの喜ぶツボが分かりやすく記載されていた。
	イラストがあったので分かりやすかった。
	カラーだと分かりやすい。
	歌のメロディーがわからないものがある。
その他	手の動きはわかるが、リズムがわからない。
	読むだけでは難しいので振り付けを見せてほしい。
	こどもが左利きのためやりにくそうだった。
	ゲームばかりでなく、昔ながらの遊びを懐かしみながら家でやっていきたい。
	身近な歌で小さい頃やっていたが忘れていた。早速家でやってみたい。

遊び集がわかりやすいという意見がある一方で、遊び集を見て、知らない歌を家で歌うのは難しいとの意見も多くあった。カラー化やリズム、メロディが分かるしくみを盛り込んだ遊び集の改良が必要である。

紹介した遊びについて、養育者自らが小さい頃に親しんでいたことを懐かしく思い出し、「こどもとやってみよう」という意見も多く見られた。

こどもと遊んでいる最中に遊び集で方法を確認することは難しいと思われた。じっくり読んで覚えるというよりは、例えば、1枚ずつのシートにして普段何気なく目にする場所（玄関やトイレ等）に貼る等のような工夫が必要であると感じた。

【試行後におけるこどもとの関わりについて】

5歳児（こどもとの関係の変化等）

いつでも、どこでも、遊ぶことができるようになった。	電車内等でたいくつせず、間を持たせることができた。
	お風呂で楽しく遊べた。
	電車の待ち時間がこどもと遊べる楽しい時間になった。
	車中で手遊びする機会が増えた。
	外出時におもちゃがなくても遊べるようになった。
こどもと向き合うことの大切さがわかった。	こどもと向き合う時間は大切だと思った。
	何気なくつけているテレビをやめて、会話やうたで関わりたいと思った。
	こどもと一緒にするように気をつけるようになった。
新たな遊びのツールとして使えるようになった。	自分より小さい子と遊ぶのに用いるようになった。
	こどもから手遊びしてほしいと言われるようになった。
遊ぶことでこどもが心を解放している姿が見られた。	こどもがいつもニコニコしている。
	遊んだ後は素直になった。
こどもの楽しそうな様子が見られた。	ふれあって遊ぶことに照れながら喜んでいる。
	楽しそう。

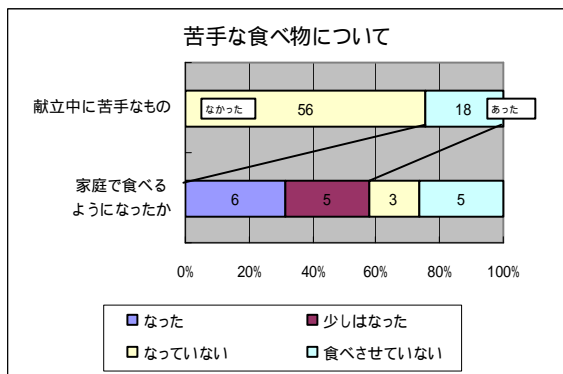
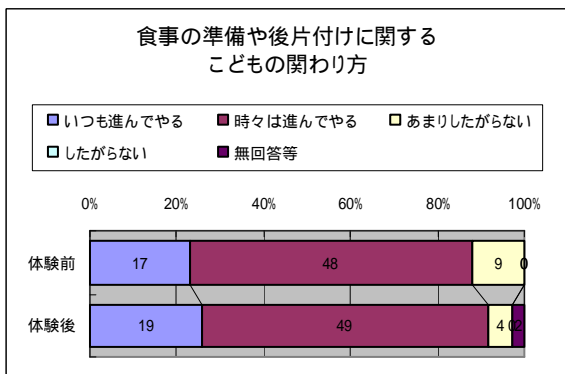
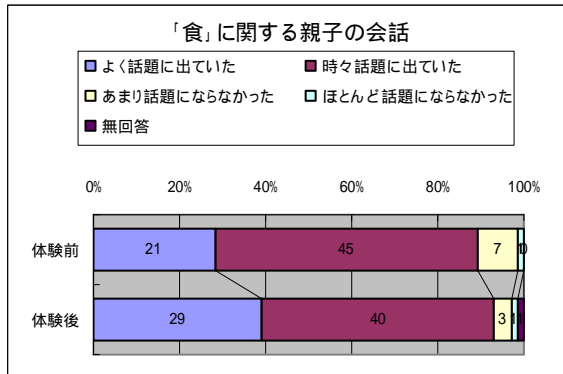
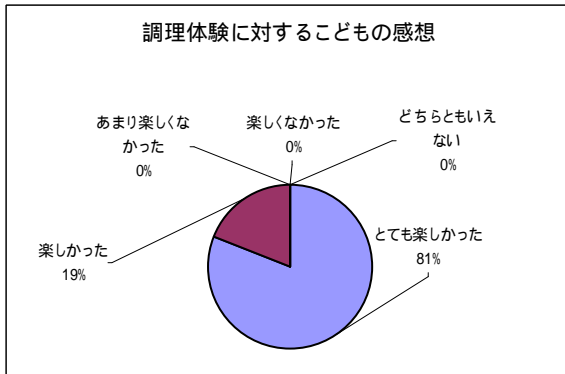
3歳児（こどもとの関係の変化等）

母と子の親近感がアップした。	よくくっついてくるようになった。
	だっこの回数が増えた。
	スキンシップが増えた。
新たな遊びのツールとして使えるようになった。	毎日やりたがり、小学一年生も兄もやりたがる。
	こどもが下の弟と一緒に遊ぶようになった。

事業後、「いつでも、どこでも、遊ぶことができるようになった」、「新たな遊びのツールとして使えるようになった」のように、遊びの幅が広がったことが伺える。また、「こどもと向き合うことの大切さがわかった」、「母と子の親近感がアップした」等のように、こどもと接することの大切さを再認識したことが伺える。

事業では「日々の生活場面に取り入れやすい『ふれあい方』としてふれあい遊びを紹介する」というねらいは、養育者に伝えることができた。また、「ふれあうことの大切さを再認識するよう働きかける」というねらいについては、スキンシップが大事であると認識していることが伺えた。しかし一方で、こどもの年齢があがると親子でのふれあい遊びの時間が減少している等の状況が見られたため、引き続き、日常生活の合間に行える遊びや親子で楽しめる遊びを紹介していくことは大切だと考える。また、より多くの家庭に取り入れてもらうためにも、こどもの発達段階に対応した遊びの内容を検討していく必要がある。

調理体験



「調理体験に対するこどもの感想」は、養育者が家庭でこどもから聞き取ったコメントをもとに回答したものである。8割が「とても楽しかった」、残り2割が「楽しかった」というものであり、今回の体験を一様に楽しんでいる。また、調理体験の実施前と実施後では、「食」に関する親子の会話、食事の準備や後片付け、苦手な食べ物の全ての項目について興味や関心が高まっている様子が見られた。

注目すべき点としては、8割以上のこどもが事業の実施以前から食事の準備や後片付けに「いつも」もしくは「時々は」進んで携わっていたことである。このことにかかるとこどもの意識が「役割としてのお手伝い」なのか、「作業への興味・関心」なのかは今回のアンケート調査から読み取ることができないが、家族の一員として「一緒に」取り組んでいることは意義深い。

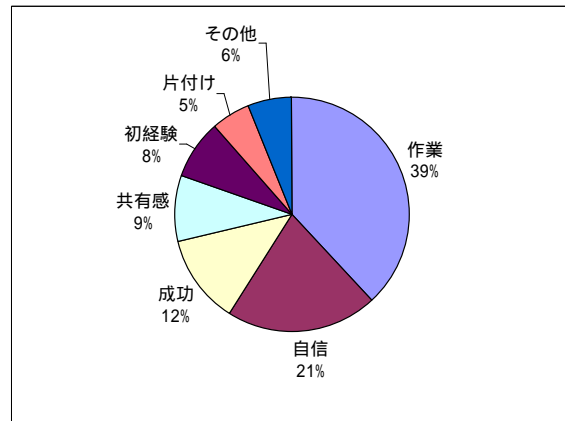
調理体験（自由記述）

【体験に対するこどもの感想】

養育者が子どもから聞き取った調理体験に対するこどもの感想を傾向別にまとめると次のとおりであった。

調理体験に対するこどもの感想（楽しかった理由）

作業	自信	成功	共有感	初経験	片付け	その他
37	20	12	9	8	5	6



- 作業 調理する作業内容（シュウマイの具を混ぜる、皮を包むなど）が楽しい
- 自信 自分で作れたことから出てくる自信
- 成功 おいしいものを作ることができた成功体験
- 共有感 みんなで一緒に作ったものを一緒に食べる共有感
- 初体験 初めて調理体験をした喜び
- 片付け 最後までやり終えたうれしさ

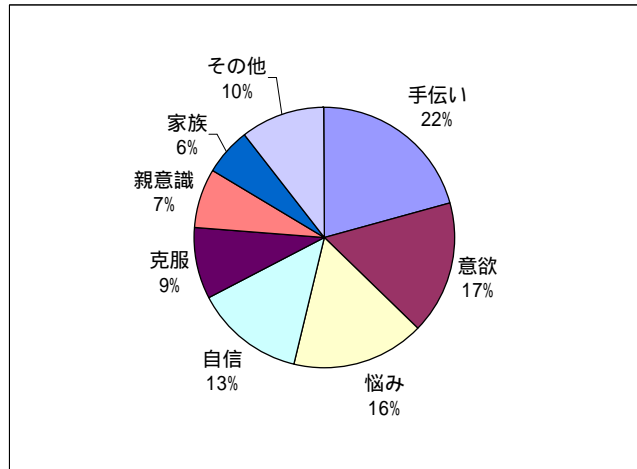
子どもにとって調理過程に携わることが大変興味深いものであることが伺える。また、自分が成し遂げた自信や充実感、友達と一緒に作ったという連帯感等、子どもが物事に取組むときの意欲につながるような様々な感情を体験したことが伺えた。

【養育者の感想、困っていること】

養育者に、体験後にお子さんや養育者自身にとって変化のあったこと、食に関する悩み等を聞いた結果を傾向別にまとめると次のとおりであった。

こどもの様子や食の悩みなど

手伝い	意欲	悩み	自信	克服	親意識	家族	その他
14	11	11	9	6	5	4	7



- 手伝い 家事の手伝いをするようになった（以前より積極的に手伝いたがる等）
- 意欲 食や調理に対して興味や関心を持つようになった
（調理の過程に興味を持つようになった、料理をしたがるようになった等）
- 悩み 偏食等食に関する悩み（食が細い、時間がかかる等）
- 自信 こども一人で調理したことから出てくる自信
（当日のメニューを家でも作りたがった、自分で作ってたくさん食べた等）
- 克服 苦手なものを食べることができるようになった
（食わず嫌いがなおった等）
- 親意識 こどもと一緒に調理・片付けをすることへの前向きな親の意識の変化
- 家族 家族に作ったり、教えたりした
（みんなに1コずつ作ってくれた、うれしそうに教えてくれた等）

こどもが調理することで自分に自信をもち、食に関心をもったことをとても喜んでいることが伝わってきた。一方、偏食等こどもの食に関して悩んでいる養育者も多い。また、家で養育者が食材を切っている包丁の音（音とリズム）に気づいて、「かたいの切っているの？」とこどもが声をかけてきたという記述も見られ、こどもの豊かな感性が伺えた。

(4) 実施機関からの報告

ふれあい遊び(0～2歳児)

a. 今回のテーマに対する感想

「家庭で子どもとどんな風に遊んでいいのかわからない」という養育者の声を聞く中、ふれあい遊びはいつでもどこでも気軽に遊べるツールとして養育者のニーズを満たすものである。ふれあい遊びをするときに大事なこととしては、親子がともにリラックスして楽しめる気持ちになるまで繰り返すことである。

伝承される遊びが少しずつ減ってきている中、ふれあい遊びが世代を超えて遊べるものとして、父親も含めた家庭全体に定着し、地域の養育者同士でも伝えあってくれることを期待したい。

b. 当日の子どもたちの様子

養育者に、なでてもらったり、くすぐられたりして、触れてもらうのを楽しんでいた。2歳児くらいになると、養育者と交代して、自分たちが養育者をなでたり、くすぐったりと、触れるのを楽しんでいた。

また、知っている手遊びは、歌詞の一部を歌ったり、動きをまねたりしていた。0～2歳児の段階では、じゃんけんの動きは十分にできないものの、指を動かし、やろうとしている姿があった。

c. 当日の養育者の様子

皆、保育士の説明や手本をよく見ており、知っている歌については一緒に歌って楽しんでいた。また、子どもに話しかけたり、顔を覗き込んだりと、子どもの反応を見ながらコミュニケーションを取り合う姿があった。また、わが子だけでなく他の子どもの様子にも微笑んだり喜んだり共感していた。その一方で、子どもが嫌がってもさせようとする養育者の姿もあった。

d. プログラムのよかった点

養育者も子どももよく知っている遊びなので楽しく遊ぶことができ、わが子だけでなく他の子どもの様子も認め合い、養育者同士のコミュニケーションのきっかけとなった点がよかった。また、冊子があるので家に帰ってから目を通したりできる点もよかった。

e. プログラムの改良すべき点

ひとつの遊びが、子どもの年齢や遊び場所によって、いろいろなバリエーションで遊ぶことができることをもっと紹介できたらと思う。また、大阪らしい地域性のあるものを紹介していけたらいいと思う。

冊子については、もう少し厚めの用紙を使用して、1枚ずつファイルにできるようにしていけば使いやすくなる。

f．今後の活用方法

園で定番の遊びを作り、園に来た人が皆その遊びを知っているというように引き継いでいけたらと思う。また、子育て支援センター事業に取り入れていく、保育所在所児に遊び集を配付する、園だよりで紹介する等についても実践していきたい。また、今回対象となった母と子のふれあいだけでなく、子と子のふれあい、養育者同士のふれあい、父親への広がり等いろいろな取組みを行っていきたい。

g．こどもや養育者への効果

こどもにとっては、養育者にふれることの気持ちよさを感じる、遊びを通じて手先の細かい動きや体全体を使った動き等を楽しむようになり、できたことを喜ぶようになる、養育者とのふれあいによって自尊感情が育つきっかけになる等の効果があると考えられる。

養育者にとっては、おもちゃがなくても様々な生活場面で気軽に遊べることを知ったことから心に余裕が生まれ、気持ちがリラックスして笑顔が増え、子育てへの自信につながることを考えられる。また、他のこどもの様子を見ることで、他の養育者との関わりが広がっていくという効果もあると考えられる。

h．意見・提案

ふれあい遊びが養育者の育児不安やストレスを和らげ、親子のふれあいが深まることのきっかけとなること、ふれあい遊びそのものが楽しいことを養育者に知ってもらうことが大事だと思う。

また、冊子を見ただけでは遊び方やメロディがわからなくなったときに、それらが分かる仕組みがあればさらによいのではないかと考える。

ふれあい遊び（3歳児・5歳児）

a．今回のテーマに対する感想

今回のように長時間親子でふれあう機会が少なかったのも、こどもにとっても、養育者にとっても、とても心温まる楽しいひと時となった。内容が、よく知っているものやすぐのできるものであったので遊びやすかった。今回のように、養育者とふれあう（スキンシップをとる）ことができる遊びをする機会を作ることはとてもよいことだと思う。

b．当日のこどもたちの様子

養育者に甘え、とてもうれしそうな笑顔を見せており、園とは違う一面を見ることができた。

c．当日の養育者の様子

こどもの笑顔に喜び、こどもと向き合ってふれあうことがとてもうれしくて楽しそうであり、親子の時間を共有する楽しさを味わっていた。

d．こどもや養育者の変化

園でこども同士でも遊んで楽しむ姿が見られた。

3歳児において、家庭で持続して遊んでいる親子が何組かあった。一方で、5歳児においては、あまり活用している様子が見られなかった。

e．プログラムのよかった点

こどもたちが、園で何度も繰り返し歌い遊んでいた。じゃんけんをするのが特に楽しいようである。今回のプログラムは、遊びの内容が簡単で、家庭ですぐ実践できそうなものというのがよかった。手軽で道具がいらず、ちょっとした家事の合間や電車の待ち時間等に活用でき、親子で楽しい時間を過ごすことができるこのような遊びを提案していく大切さを感じた。

f．プログラムの改良すべき点

1回だけでなく、何度も繰り返すことが必要である。また、家庭生活に取り入れるふれあい遊びの内容としては、音楽がなくてもできる素朴なものがよいと思う。

g．今後の活用方法

養育者が参加する行事の中にふれあい遊びを取り入れていく。また、降園のお迎えの時に、他の学年でも活用し広げていく。その他に、クラスで行う活動、異年齢交流、地域とのふれあい行事等にも活用していきたい。

h．こどもや養育者への効果

養育者の親子で過ごす時間を大切にしようとする意識が向上するとともに、親子で遊ぶ楽しさやふれあう喜びを感じ、互いに愛情を深めることができる。このような時間を少し持つだけでこどもたちが喜び、遊びも簡単ですぐ覚えられるのでやってみようとする養育者が増える。

i．意見・提案

今回は親子のふれあい遊びをテーマに試行事業を行ったが、遊びの種類によっては、クラス全体のこどもと養育者で遊ぶことで盛り上がり、楽しさが増すようなものもある。プログラムを実施する際は、どのようにすると効果的か等を検討していく必要があると思う。

調理体験

a．今回のテーマに対する感想

日常生活に密着したテーマであり、身体の仕組みや食材についての話等、よく工夫されていて分かりやすかった。家庭で手作りすることがほとんどなくなったシューマイ作りを体験したことは、こどもにとって興味深かったようである。友達と一緒に作り、食するという事は、「食」に関しての興味・関心を深める良い機会になったと思う。

b．当日のこどもたちの様子

園において事前に調理体験の話をこどもにする等の意識付けを行っていたので、調理体験当日は思った以上に集中して調理に取り組んでいた。しかし、慣れない場所と慣れない大人に緊張している様子も見られた。

食事中は、普段食べるのに時間がかかるこどもが、とてもよく食べていたのが印象的であった。また、苦手な食材を苦にせず食べたこどもがいたことも印象的であった。

c．こどもの変化

お弁当にロールおにぎりやシュウマイを入れてくるこどもがたくさんいた。その中には、自分で作ったというこどももいた。「自分にもできる」という思いを持つようになり、食べる、調理するという事に以前より目が向くようになったようである。また、園で「おいしかったなあ」「また行きたいなあ」と友達同士で話していたり、家での会話の話題にあがっていたりしていたようである。

d．プログラムのよかった点

普段気にせず食べている食材について、でき方やその変化に気づき、実際に触れることができた。また、苦手なもの（グリーンピース等）を食べてみようと思うようになったこどもや、レシピを配ったのでその日にもう一度作ったというこどもがいたことがよかったと思う。

e．プログラムの改良すべき点

調理中にこどもが使用する手袋が大人のサイズだったので扱いにくそうだった。また、安全面に考慮する必要があるものの、大人の数が多いように感じられた。

食物アレルギーの激しいこどももいるので、食材選びから考えることが必要である。また、園での昼食との関係を配慮して、例えば、その日の給食をなしにして、調理体験が昼食を兼ねるよう量を調整する等が必要である。

f．今後の活用方法

身体の仕組みに関する食べ物の役割や働きを教えることで、食べるのが健康な体づくりにつながることを教えていきたい。

菜園活動を通じて野菜を育て収穫する体験をさせたり、給食時に食材がどんなものからできているのかを教えたりすることで、食に関する興味づけを行っていきたい。

g．こどもへの効果

「調理体験」をすることによって、作ること、食べることの楽しさ、食べ物自身への興味が広がる。そして、自分で作った料理を食べることで、達成感を感じ、次もやってみようという意欲へとつながっていく。自分にもできるという自信につながり、率先して家の手伝いをするようになり、自分も人の役に立つことを実感することができる。

h. 意見・提案

たくさん大人の子どもにつき、工程が細かく決められていたので、やや窮屈さ、不自然さを感じた。

体験が終わったあと、園に戻り、果物やパン等を食べて足りない分を補ったが、ほとんど食べない子どもや通常通り食べる子ども等、さまざまな子どもがいた。

今後の取組みとして、その日使う食材の下準備や調理の仕方を見せる等、食材に関わる活動を保育所で取り入れていきたい。

(5) 全体考察(プログラム策定にあたっての視点)

ふれあい遊び

ふれあい遊びは人と人をつなぐための有効なツールである。そのつながりは、遊びの時間が終わっても、参加した人から別の人につながって広がりを見せる不思議なツールである。今回、各園で実施したのはそれぞれ1回だけであったが、その場での遊びの体験が、家庭や地域へ発展していくことの期待をこめた事業であった。ふれあい遊びを家庭や地域に広げていくためには、折に触れて種落しをしていくことが望ましく、その意味でも継続して取り組むことが必要である。

普段の生活の中で、「遊ぶ時間がない」と感じている養育者に対しては、子どもへの関わり方を具体的な事例をあげて紹介していくと、比較的家庭に取り入れやすいと考えられることから、今回の試行事業においては、家庭で気軽に遊べるようにと、遊びの紹介と併せて、日々の生活の中への取り入れ方や子どもの発達段階に応じた遊び方等を盛り込んだ「ふれあい遊び集」を配付した。しかしながら、「知らない遊びは、一度遊んだだけでは家で思い出せない」「リズムや音楽に合わせた動き方やメロディが分かるようにしてほしい」等の意見も多く、より多くの家庭で利用されるような工夫が必要である。

今回配付した「遊び集」は、0～2歳児の養育者が最もよく活用していたが、子どもの年齢があがっても活用できるよう、子どもの発達段階に応じて、興味を持ちやすい遊びの内容を選択することが重要である。また、遊びの紹介方法としては、遊び集の配付だけでなく、いろんな歌や音楽を知りたいという養育者に対して、幼稚園や保育所が所有しているCD等を借りられるような工夫も必要であると考えられる。

また、ふれあい遊びを、養育者が「遊んであげる」側、子どもが「遊んでもらう」側と考えるのではなく、親子がふれあうことをともに喜びあえるものとして発信していく必要がある。

子どもの年齢があがるにつれて、ひとりで遊べるようになり、ふれあい遊び以外の遊びも増えていくが、子どもは心では養育者との関わりを求めている。子どもの年齢があがっても、子どもとふれあう時間を持つよう啓発することが必要であるが、それは必ずしも遊びの時間という独立した形をとる必要はなく、日々の生活場面の中に組み込み、自然にふれあっているように発展させる工夫を広めていくことが肝要である。

調理体験

食育の大切さが広く一般に認識されるようになって久しいが、調理体験は、本物の食材を用い、全身の感覚全てを使うことができる直接体験として大きな意味がある。自分の力で新しいものを作るという創造の楽しみを存分に味わうことができ、また、その過程において調理の音と食物の匂いが一緒に「見える」のである。また、工程の最後に自分が作ったものを食べることができ、さらに後片付けも自分で行うことで、達成感を短時間に確実に実感できる体験となった。

おいしさは食物と一緒に身体全体に記憶として残り、みんなで作ったものをみんなで食べることで共有感も生まれる。「楽しい」「うれしい」等いろいろな快感情の総動員が、こどもの意識にプラスに働いていることは、苦手なもの（食わず嫌い）を克服できたこどもが多くいたことがそれをよく物語っている。調理体験は、普段苦手である食材との新たな出会いの場を提供することができる。

実施後のアンケートの感想では、自信にあふれたわが子の積極的な言動にとまどいながらも喜んでいる養育者の姿が多く見られたが、すぐにシュウマイやおにぎり作りに取り組んだり、お手伝いをしてもらったりと、多くの養育者がこどもの意欲を汲み取った対応をしていることは喜ばしい結果であった。

他方で、こどもにお手伝いをさせると「余計時間がかかるのでさせていない」という養育者の声も聞かれた。日々の慌ただしい生活時間の中で、こどものペースに合わせながらの家事は、養育者にとって負担となることもあるのは確かである。しかしながら、こどもが家事に参加することは、こどもの成長を促す、意欲の芽を伸ばすものであるという視点からも重要であり、「こどもと一緒に 活動をしましょう」という啓発が必要であろう。

一方、食べ物を使った体験は、衛生面に多大な配慮が必要となるものの、味覚を含む全身の感覚の全てを使用できる貴重な体験活動であるうえ、間接的に養育者への啓発という効果も期待できる取組みであることから、今後とも、より多くのこどもたちに体験の機会を提供できる工夫が必要である。

試行事業を通して（就学前児童健全育成プログラムの策定にあたって）

今回の試行事業については、同じく19年度に実施した生活実態アンケート調査の結果を踏まえて実施したものである。子育てに対する意識は高いものの具体的な行動に移せないで悩んでいる養育者に、「こどもとのふれあいは大切です」というような啓発的な情報を提供するという従来の方法ではなく、具体的な行動に移せる方法を提供する事業として、最も身近な素材で生活に取り入れやすい「遊び」と「食」をテーマとする事業を実施した。

生活実態アンケートでも明らかなように、最近のこどもの遊びは物と関わる遊びが多くなりがちである。人と関わる機会が減少しているという現状から考えると、こどもたちの生活環境を人との付き合いを多く持つ生活に転換する必要がある。つまり、まずはこどもがいろいろな人との関わりを多く持てるよう工夫をすることが周囲の大人や社会の役目である。

また、日々の生活の中で、こどもにとっても養育者にとっても、親子で向き合って過ごす時間はとてもうれしく楽しいものであるが、一方で養育者もこどもたちも日々慌ただしく生活してい

ることはまぎれもない事実である。子どもと関わる時間がないと悩む養育者は多いが、しかしながら、養育者に必要なことは、単に子どもと長時間関わるのではなく、日々子どものことを心にかける意識を持っていることではないだろうか。保育所や幼稚園等では、養育者がゆっくり子どもと向き合う機会を提供することが必要なかもしれない。

しかしながら前述のように、子どもにとっては養育者だけではなく、その上の世代や地域の人々や異年齢の子ども等様々な人々とのふれあいも大切である。様々な人々とふれあうことのできる体験として、伝承遊びがあげられる。伝承遊びはどの世代の人も遊べる、つまり知っていてできる遊びであることから、いろいろな機会を通して伝承遊びにふれる体験を提供することが望ましい。現在は家庭や地域で自然に伝わる条件が少なくなっていることから、プログラムとして提供することが意味を持つと考えられる。

また、子どもが様々な体験を重ねるうえで、「楽しい」と感じることが大切である。「楽しい」ことは何度もやってみたいので、強制されなくても自ら進んでチャレンジしていくうちに、自分の力として身についていくのである。今回実施したふれあい遊びと調理体験は、子どもにとって「楽しい」「うれしい」「面白い」という様々な快感情を体感できる事業であった。新しい知識を得ることや達成感を持つこと、友達と体験を共有しあうこと等、子どもが得たことはいっぱいある。中でも、直接人とふれあうことそのものの快さは何にも増してうれしいものであり、大好きな養育者とふれあうことの喜びを共感しあえたことはこれからの生活にも大きく影響していくはずである。これからの取組みとしては、ふれあい遊びのプログラムに様々な世代の人とふれあえる伝承遊びも取り入れる工夫や、大阪のまちで育つ子どもたちへ伝えていくものとして、大阪に残っている遊びの収集等も有意義だと考える。また同時に、世代を越えて受け継がれてきた文化の蓄積を、物ではなく次代を担う子どもの心そのものに残していけるような取組みも大切である。

今回の試行事業では、人と人とのふれあいは単に向き合って対話するという平面的な図で行われるのではなく、ともに何かを行う行為を通して同じ時間を過ごしていくこと、それがまさしくふれあいであり子どもの体験であることが知見として得られたと考える。例えば、食事は毎日3回、365日、一日も欠かすことのできないものである。今回の調理体験は1度だけの体験ではあったが、その後の家庭での生活や家族との関わりに変化をもたらすことが確認できた。調理体験に関しては、衛生上の問題やアレルギー等の課題があるが、克服できる手立てを探していきたい。「望ましい食習慣の育成」は家庭の姿勢を抜きにしては考えられないことから、「食」を通じた取組みとして、例えば「簡単で美味しい食事のレシピ紹介」や「菜園活動を通じた生命の大切さ」、「食への感謝」等、様々な手法を通して家庭での発展を広げていくことが必要である。

子どもが様々な人々とふれあいながら、いろいろな体験を通して世の中の本物を知り、向き合っていける萌芽を作っていくことが必要である。